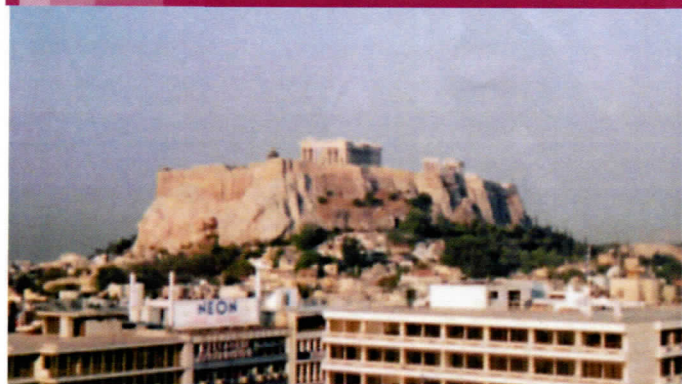




ホテルの部屋の窓から望むアクロポリスのパルテノン神殿

作家小田実が「何でも見てやろう」と海外を歩きアテネを訪れた時、アクロポリスの魅力に憑りつかれ、「ヨーロッパで最も感動したのは、アクロポリスの丘だった」と絶賛した。

古代ギリシャの代表的ポリスであるアテネのアクロポリスとは、「上の都市」という意味で、アテネ市内の高さ70m、面積約4万㎡の石灰石の丘にある。そのアクロポリスには、破壊されながらも多くの古代遺跡が残されている。中でも圧倒的な存在感を誇り、最も人気があるのが、紀元前432年頃に古代ギリシャ最高の建築技術によって建設され、ヨーロッパ建築の美の源泉とも言われ、今なお美しい姿を見せてくれるパルテノン神殿である。ヨーロッパの代表建築とされる、ローマのパンテオン、パリのマドレーヌ聖堂、ロンドンの大英博物館の正面にある基壇、円柱、円柱上部のフリーズに、揃って美の源泉を思わせる美しいプロポーションを生んでいる。

アクロポリスにある神殿、劇場、美術館、神域、聖域、門にはそれぞれ由緒ある神や王の名を冠せられている。パルテノン神殿は、古代ギリシャ神話の最高神・ゼウスの娘であるアテナに捧げられたが、そのアテナが男の神と結婚せず生涯処女(パルテノス)でいたことから「パルテノン」と名付けられた。



17世紀ヴェネツィア国の爆破により荒廃したパルテノン神殿

パルテノン神殿は、31m×70m、周囲約160mで、バチカンのサン・ピエトロ大聖堂、日本の法隆寺とともに世界三大宗教建造物としても知られている。

歴史的に戦火をかいくぐってきたパルテノン神殿は、過去に周辺諸国の権力争いに振り回されてきた。パルテノン神殿はギリシャにとって栄光の証であったが、ギリシャ諸都市の衰退とともに表舞台から姿を消し、特にビザンティン帝国はキリスト教の聖堂に改修し、神殿に残された彫像も偶像破壊

により取り壊した。

パルテノン神殿は、ペルシア戦争がBC449年に終わり、BC431年にペロポネソス戦争が始まる18年間の短いアテネ全盛期に15年間をかけて建設された。だが、古代ギリシャ全域を巻き込んだペロポネソス戦争で、BC404年アテネのデロス同盟はスパルタのペロポネソス同盟に敗れ、パルテノン神殿は苦難の道を歩むことになった。時が経つに連れローマ帝国、十字軍国家、オスマン帝国、ヴェネツィア共和国に支配されるようになった。15世紀にはオスマン・トルコによって、神殿はイスラム教のモスクに改造もされた。そしてオスマン・トルコ軍の弱体化によって伝統あるパルテノン神殿は、壊滅的な破壊を被るのである。無残な姿を晒すようになったのは、1687年にヴェネツィア共和国軍がアテネを攻撃して、オスマン・トルコ軍の弾薬庫として使われていたパルテノン神殿を爆破したからである。神殿の内部はこの爆発によって破壊され、修復工事に手を付けられたのは、爆破から300年近くも経った後である。神殿の周辺は荒廃したままで今以て損傷が激しく、現在も工事が続けられているが、修復工事がいつ完了するのかは誰にも分からない。

アクロポリスは、アテネ市内ならどこからでも行けるが、土地の高低や高いビルのせいで、どこからでも見えるわけではない。昼夜を問わず最高の眺望を楽しめるのは、意外にもホテルの窓越しである。特に繁華街の中心シンタグマ広場に面したホテルの上級階からの一望は見事である。シンタグマ広場に面した国会議事堂前では、毎日定刻になると儀仗兵による派手な動作の交代式が行われる。服装も季節ごとに異なり、見ているだけで楽しい。

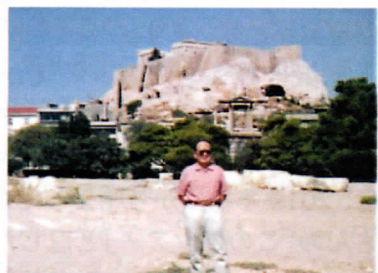
夕日が落ちるころにピレウス漁港近くのレストランで潮風に吹かれながら海鮮料理を嗜み、ライトアップされた建築美の源・パルテノン神殿を眺められるのは、正に建築美が風景美に変わったからである。アテネを去る時、何度もアクロポリスを振り返り、現代に伝わる偉大な世界遺産に感謝の意を込めて別れを惜しむことになる。 エッセイスト 近藤 節夫



三々五々パルテノン神殿へ向かう観光客



第1回オリンピック大会/パンティナイコ会場からアクロポリスを遠望



アクロポリスの丘を背に(近藤)



国歌議事堂前で行われる衛兵交代儀式